

私と民医連 (24)

私と民医連24回目は、熊谷芳夫先生・医療団副理事長に登場して頂きました。右の写真は3月31日「原爆被害者の会」のお花見のときのもの。熊谷先生は右端に、文中に出てくるロバート・ナン先生は左から3人目の方。



新室見診療所所長 (福岡医療団副理事長)

熊谷 芳夫

3月31日、本年も恒例の「原爆被害者の会」博多区支部のお花見に招かれた。満開の桜の山王公園、カナダ・ブロック大学のロバート・ナン先生も含め30名くらいが集まった。被爆者の平均年齢は78歳くらいで支援者も含めてみんなで被爆体験、核廃絶、フクシマを語りあい、ハーモニカ伴奏で故郷、さくら、長崎の鐘などを歌った。私はこのような被爆者の草の根の取り組みが世界の反核運動を今日のように大きく進めていることを挨拶で述べた。

このように私が被爆者と関わりを持つようになったのは千鳥橋病院入職時にさかの

医学生時代、九大病院の方からいつも見ている隣の千鳥橋病院を大きくしようと決意

ぼる。1978年九大医学部を卒業してすぐ千鳥橋病院に入職、当時の千鳥橋病院友の会の中心メンバーが被爆者の方だったため、友の会の方々と友の会旅行や夏祭りなど楽しく過ごす中、被爆者の方との交流が深まっていった。

前任の本庄院長が市長選挙や総選挙に立候補する中で代わりに被爆者医療を担当するようになり「千鳥橋病院被爆患者会」に関わるようになった。以来診療の場では被爆外来、被爆者健診、諸書類の作成など、常に被爆者の皆さんとともに歩んできた。そして福岡県「非核の政府を求める会」の事務局も担当し、3.11以降は反原発の運動にも関わるようになった。

その千鳥橋病院と初めて接触したのは1970年入学当時の民医研(民医連運動研究会)の活動を通じてである。千鳥橋病院の取り組む野間四つ角排気ガス鉛中毒公害調査に同じクラスの小西先生

(現理事長)、先輩の下川先生(現エンゼル病院産婦人科)とともに取り組んだのが始まりである。

以後クラスの皆と医療問題研究会を作りスモンや水俣病など当時の医療問題を学んできた。その後、学生運動に明け暮れる中、医療問題とは離れていたが上級生になり再度水俣病フィールド活動に参加し、春休み、夏休みと現地水俣に医療系の学生と共に通い患者さんの実態に触れてきた。院内薬局の堤さんや松浦さんとも一緒だった。

そして、そこで働く民医連の職員、献身的に取り組む現地の医師や看護婦さんの姿、被害者の為に水俣病の研究に取り組む大学の先生たちの姿に触れ、これこそ医療の原点と思った。これが民医連に入るきっかけとなった。

更に最終学年になりクラス・自治会で卒後研修改善活動に取り組み、千鳥橋病院や民医連の卒後研修を学んだ。自治会の卒後研修の資料は千鳥橋病院で印刷させてもらうため、毎日浜松町から金平団地と九大病院の塀沿いを歩いて千鳥橋病院へと通った。

その中で九大病院の方からいつも見ている隣の千鳥橋病院を大きくしようと決意して正木先生、嶽村先生、新里先生(現浦添総合病院外科)と共に民医連に参加した。学生時代の水俣病の関わりから脳神経に興味をもち、脳卒中急性期を担当し国立循環器病センターでも学んだ。その後、老年科、在宅医療、認知症に取り組み、現在、診療所の所長として、地域にしっかり根を張って認知症を中心とした在宅医療に取り組んでいる。

そして今でも学生時代に過ごし育ててくれた千代や馬出に感謝し40年前と変わらず歩いている。